

---

## コメント

---

### 朴 秀娟 中級日本語学習者の口頭表現に見られる副詞の特徴 ——ストーリーテリングを中心に

副詞は日本語教育において体系的に扱われているとは言えない。本論文は、国立国語研究所が公開している学習者コーパスI-JASのデータを分析し、ストーリーテリングにおける学習者の副詞の使用傾向について考察したものである。分析の結果、学習者の副詞の使い方には、産出されるバリエーションが少ない、主観的な副詞の産出が少ない、話す内容にかかわらず初級で学んだ副詞を使おうとする傾向がある、などの特徴があることがわかった。副詞は学習者の表現力を高める上で重要な素材であり、その教育を考える上で重要な示唆を与える内容となっている。(1)

---

### 李 泓璋 中国語話者が母語の知識を活かすための文法記述試論 ——すでに起きた出来事を表す「ト・タラ」を例に

中国語母語学習者が持つ学習者の母語の知識を生かして、事実的な「と・たら」が使用できるようにするための指導方法を提案する論文。中国語の「時」を使った表現が「ト・タラ」に対応する場合は5割程度であるが、「……就……」は9割、ゼロ形式の場合は8割に対応するなどの調査結果から、まずは「と・たら」に対応する中国語を日本語にする際、「たら」を用いるように指導することから始め、テ形接続との違いについては主語の異同や動作の意志性に留意させることが有効であるなど、具体的な提案がなされている。(M)

---

### 若松史恵 母語話者の話題開始部冒頭に現れる言語形式 ——学習者との比較から

初対面会話における談話開始部冒頭の表現と、それらの表現がその後の談話展開にどう関わるかに着目した研究。母語話者と学習者は同じ表現を開始部冒頭に用いても、その後の展開が異なる場合があり、それが学習者の談話展開を不自然に感じさせる要因となる場合がある。今回の調査では、母語話者が多用する「でも」「なんか」については学習者との違いが大きく出るなど、談話研究と日本語教育の双方に資する興味深い結果が示されている。(M)

龔 柏榮 「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境をめぐって  
——日本語教育における類義表現の扱いへの示唆

文法的類義表現「ノデハナイ」と「ワケデハナイ」の使用環境の違いをコーパスから調査した研究。いずれも、話し言葉・書き言葉の双方に出現するものの、「ノデハナイ」は前者に、「ワケデハナイ」は後者に優位に用いられること、また書き言葉における使用環境として「ノデハナイ」は従属節に、「ワケデハナイ」は主節に用いられやすいことを指摘した。両形式の意味の違いに過度に依存することなく学習者に違いを教えることを模索した点が興味深い。(M)

城戸秀則 習慣を表すスルとシテイルの扱い  
——『みんなの日本語』を例に

ル形(スル)とテイル形(シテイル)にはともに「習慣」を表すとされる用法がある。例えば、両者は「毎朝6時に{起き/起きてい}ます。」のような例では置き換えが可能に見える。こうした点は日本語教科書の提出例などからも強化されるが、実際にはどちらかしか使えない場合も多い。本論文は、こうした習慣を表すル形とテイル形の違いを丁寧に取り上げるとともに、そうした観察に基づく両者の指導案を提示している。日常の教育場面から課題を取り上げ、教育の改善につながる記述を目指している点で、日本語記述文法の1つのあり方を示す好論文である。(I)

徐 乃馨 日本留学で名詞修飾の習得が進むのか  
——ストーリー描写における使用に基づく分析

名詞修飾(連体修飾)は日本語習得における難関であると認識されており、日本語のレベルが上がっても非用(回避)が多いことが知られている。本論文では、IJASのストーリーライティングのデータを用いて、学習環境(JSLかJFLか)の違いが名詞修飾の習得に関わるか(=JSL環境で名詞習得の使用が促進されるか)という研究課題が検討されている。考察の結果は、必ずしも予測通りのものではなかったが、その要因としては、いくつかの可能性が考えられ、それらを具体的に考えていくことで、言語習得に関わる新たなプロセスが明らかになる可能性がある。(I)

## ダンタイクインチャー

### ベトナム語を母語とする日本語学習者の ストーリーテリングにおける視点表現の使用変化 ——視点指定方法による

日本語の視点が関わる文法項目の使用について、ベトナムの国語教育で小学校低学年からよく用いられる視点指定作文の方式を使用して、初級・中級・上級の学習者が受身・授受補助動詞・移動補助動詞をどのように使用できるかを調査した研究。作文を書く際に視点を指定することにより、文法項目の使用が意識され、視点の一貫した文章が書けるようになる可能性が示唆されている点は、日本語作文指導への興味深い提言となっている。(M)

## 李 嘉 中国人日本語学習者のカタカナ認知処理に関する調査研究

中国語を母語とする日本語学習者はカタカナの認知処理に困難を覚え、外来語を苦手と認識しているという先行研究が多い。これは、漢字が表意文字であるのに対してカタカナが表音文字であるためと考えられるが、そうであるなら、同じ表音文字であるひらがなとカタカナの処理には差がないはずである。本論文はこの仮説を検証したもので、調査の結果、この仮説は支持された。この結果は、カタカナの方が難しいという学習者の意識と一致しないが、これはひらがなに接する時間がカタカナよりもかなり多いことに起因する「錯覚」である可能性がある。日本語非母語話者にとっての日本語の難易度を高めている最大の要因が表記の複雑さにあることからしても、今後の発展性が期待できる好論文である。(I)

## 近藤めぐみ やさしい日本語におけるカタカナ表記語を知る試み

「やさしい日本語」を使った情報提供の媒体に、NHKのNews Web Easy (NWE) というウェブサイトがある。このサイトは、同日に配信されたニュースNHK News Web (NW) との対応があることから、日本語教育の素材としても貴重なものである。本論文は、NWEにおけるカタカナ語の分析を通して、「やさしい日本語」への書き換えの実態に迫ろうとする労作である。調査の結果、NWEのカタカナ語の高頻度語の中には、「ビデオ」「チェック(する)」「テスト(する)」のように、NWからNWEへの書き換えの中で現れるものもあることがわかった。こうした結果は、日本語における「言い換え」の実態を捉えており、日本語の語彙特性について考える際にも示唆を与えるものと言える。(I)

---

金田友里江 日本語学習者の日本語学習に関する自己評価の語り方  
— 中国の大学で日本語を学ぶ学生と  
教師の相談場面に焦点を当てて

学習者と教師の相談場面において、学習者がどのように自己評価を語るか、同時に学習者の自己評価に教師がどのような反応を示すかを分析。学習者は自身と他者とを比較して学習の困難を語り、それを受けて教師には、問いかける、学習者が語りたいことを引き出す、などの言語行動が見られた。教師と学習者が面談する場面をより良いものとしていく方法、その際の教師の行動と学習者への一層の支援の在り方について考えさせる実践的な記録ともなっている。(M)

---

青木さやか 動画アノテーションを活用した日本語教師のための  
自己研修システムの実践

日本語学校での授業を録画した動画に、アノテーション（ボタンによる評価・コメントの記入）を行うという日本語教師研修の実践報告。動画アノテーションを活用し授業観察を行うと、印象評価に陥らずに相互評価ができ、また、授業観察の観点が明確になることなどが明らかになった。授業を担当した教師自身もアノテーションを行い、授業者・観察者の評価を共有できるシステムの紹介ともなっており、多くの教育機関での試用が大いに期待される。(M)

---

彭悦 映像作品視聴時の語彙学習ストラテジーの利用  
— 日本語教育への応用に向けて

日本語の映像作品視聴時に使用される語彙学習ストラテジーに関して調査を行った。具体的には、学習者が映像作品を視聴する際、通常の視聴と、時間制限やテストを前提とした場合とで、学習者が活用する語彙学習ストラテジーにどのような差異があるかを分析した研究。そこから、授業中に取り入れるべき活動（例えば、グループディスカッションなど学習者が声を出せる時間を作り、音声面から語彙の記憶を強化させる、など）と、授業後に取り入れるべき活動（例えば、各自のメモを整理させ、学習を振り返る習慣を強化する）が具体的に提案されている。(M)

松本匡史 コスタリカ人日本語学習者はなぜ満足しているのか  
——言語学習ビリーフ調査結果を通して

教室型の日本語教育において、教師と学習者のビリーフは必ずしも一致するとは限らない。本論文は、中米コスタリカにおける日本語教育に携わった筆者の体験に基づく研究である。筆者は、学習者との間にビリーフの違いを感じていたが、それにもかかわらず、学習者の授業に対する満足度は極めて高かった。筆者は、その要因を探るためにアンケート調査を行い、その結果、日本語母語話者教師（NT）と日本語学習者（CRS）の間に、かなり多くの項目においてビリーフの違いがあることがわかった。その一方、NTの授業に対するCRSの評価は非常に高いことが確認された。本論文で提示されたこの一見相反する結果は、日本語学習の目的が必ずしも「実用」にあるわけではなく「趣味」である可能性が高い、海外の日本語教育の実態を捉える上で極めて重要なものであると言える。

(1)